



校長室から

8月9日に想う『祭りの場』と「いのちはだれのものか？」

校長 峰 薫

平和学習では「生きる」ということや「命」について考えてほしいと考えていました。戦争は、「生きるべき命」と「死んでもいい命」に命を選別してしまいます。自分の「命の価値」を誰かが勝手に決めてしまうのが戦争です。

林京子さんは、高等女学校時代に長崎市の爆心地近くで被爆し、被爆体験を小説にすることをライフワークにしました。芥川賞を受賞した『祭りの場』では、林さん自身の投影である主人公が、被爆した14歳当時と30年後の44歳時点の視点で、原爆炸裂時の様子や被爆に苦しむ人々を描いています。爆心地にいて生き延びた人々には、11時2分の記憶がない人が多いそうです。爆音も爆風も、キノコ雲も認識できないうらい瞬時に意識を失ってしまい、意識を取り戻した時点から被爆の記憶が始まります。その後、離れた場所にいた人の証言や米軍の記録データなどから、空白の部分をも自分の体験として再構成するそうです。

『祭りの場』という題名は、被爆の内容と不釣り合いな気がするかもしれません。8月9日の朝、主人公は、広場に若い男女が集まって円をつくり、出征する若者に好きな女性は誰かを尋ねてはしゃいでいる場面を目にします。戦地に向かう若者を、あえて明るく見送る儀式(=祭り)のようでした。主人公が原子爆弾炸裂後に意識を取り戻して、建物から飛び出て逃げる途中、広場の無惨な様子を見るという場面が印象的に描かれています。

東日本大震災をはじめ、自然災害で命を落とされた方も多くいらっしゃいます。命の喪失を防ごうと、防災工事を行ったり防災訓練を行ったりしていますが、人災に対する防災は見えづらく難しいのが現状です。また、命の軽重を他者が決めることは許されません。同様に、自分の命を軽く扱うこともあってはならないことです。

大阪大学大学院の教授である鷺田清一さんは、「生と死をめぐる断章」のなかで、「いのちはだれのものか？」という問いに対して、「ひとの身体と生命は、食や性、育児や介護の場面ひとつとっても分かるように、いつも他の身体とのまじわりややりとりのなかにあるのであって、特定の身体の座をもつ生命の行く末は、その生命を生きる者、その生命に与る(関与する)人びとのものでもあるのだ。(中略)からだはだれのものか、いのちはだれのものか。これは、ひとがだれと生きてきたか、だれとともに生きつつあるかという問いとともに問われねばならない問題なのである。」と述べています。命は自分と、自分に関わってくれた人々、これから関わるだろう人々のものであり、かけがえのないものだという事です。



前期クラスマッチ

7月19日(水)、前期クラスマッチを開催しました。各クラス数チームに分かれ、バレーボールで勝敗を競いました。試合前にはクラス全員で円陣を組むなど、クラスの団結と親睦を深める機会となりました。



オープンスクール

7月21日(金)、オープンスクールを開催しました。約50名の中学生、保護者の方に参加していただきました。系列説明や体験授業、部活動紹介という内容で、中学生と一緒に活動したり、教室案内をしたりと平高生も学校の良さを伝えようと熱心に取り組みました。



部活動大会報告

卓球愛好会 佐世保地区新人選手権

個人戦シングルス

林 一回戦 対 佐世保高専 1-3 負

藤澤 一回戦 対 佐世保工業 3-1 勝

二回戦 対 上五島 0-3 負



個人戦ダブルス

藤澤・林ペア 一回戦 対 佐世保南ペア 3-0 勝

二回戦 対 佐世保工業ペア 0-3 負



サッカー部 全国高校サッカー選手権大会長崎県大会県北地区予選

対 対馬 1-0 勝

対 佐世保商業・波佐見 5-0 勝

対 清峰 0-4 負

